九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

横山 晃一郎教授 追悼論文集

https://doi.org/10.15017/10696

出版情報：法政研究. 56 (3/4), pp.1-16, 1990-03-24. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

横山晃一郎教授追悼論文集

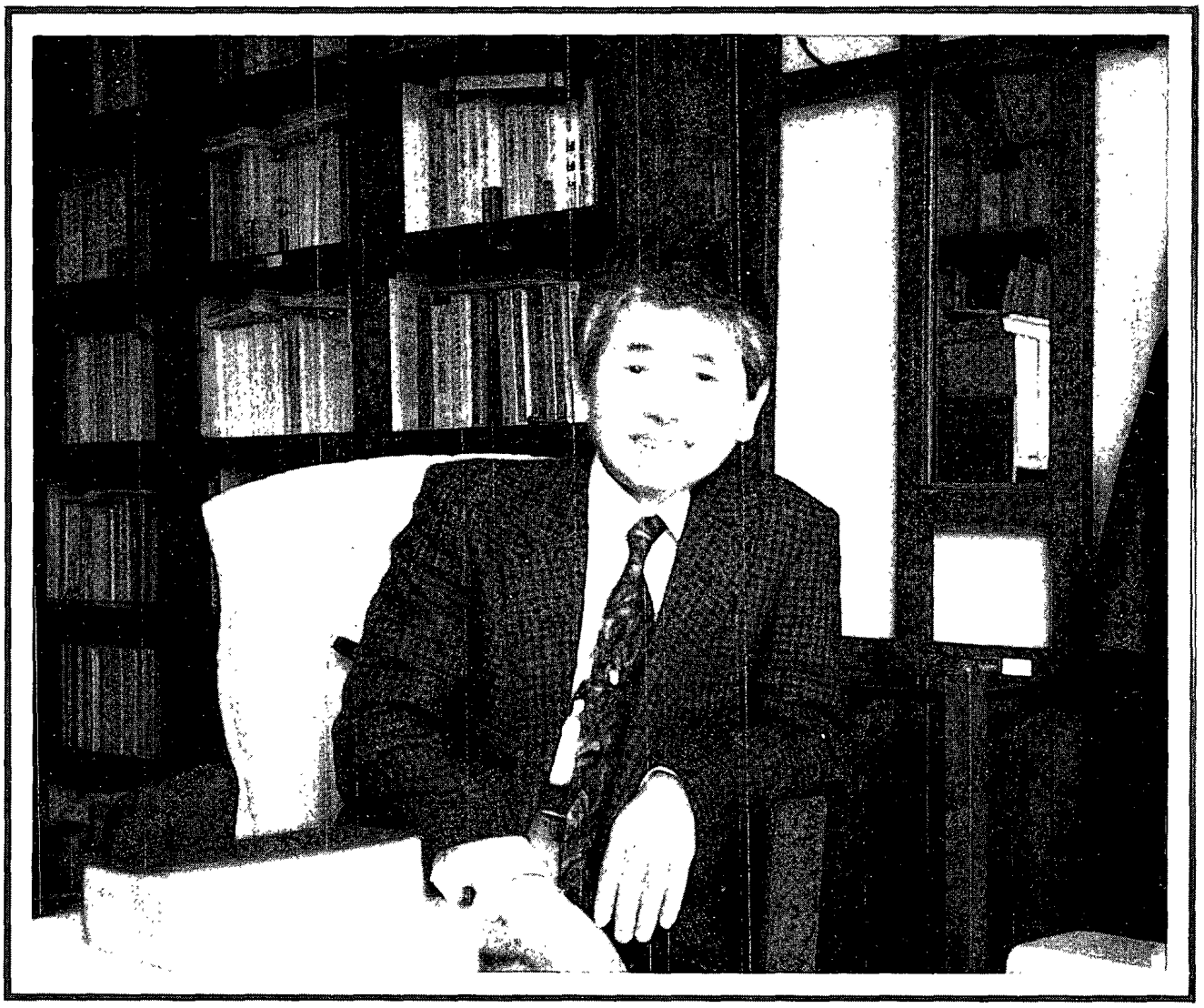
題簽　手島　孝

謹んで

故横山晃一郎先生に捧げる。

一九九〇年三月

執筆者一同



横山晃一郎先生遺影

横山晃一郎先生

教授は、昭和四年一二月一四日、栃木県に生まれ、昭和二八年三月に名古屋大学法学部を卒業の後、同学部助手、愛知学院大学法学部講師、同助教授、同教授を経て昭和四九年四月一日に九州大学法学部刑事訴訟法講座担当教授に就任された。

教授が最も力を注がれた刑事訴訟法学の分野では、捜査手続から再審に至るまで主要な問題のすべてに輝かしい業績を残された。刑事手続が如何にして憲法の規定する人権保障の精神を充たしうるのか。教授の念頭にはこのような問題意識が常にあり、そこから緊急逮捕の違憲性、身柄拘束中の被疑者取調の否定、証拠法における証拠開示と厳格な証明の重視等々に関して精力的に論説を展開された。当事者主義のあるべきモデルを探求し、裁判官を検察官の「批判者」として位置づけられた教授は、その制度化を「判事・弁護士交流」論の中で示された。また、教授は刑事法解釈方法、罪刑法定主義、社会主義法、宗教法制等を始めとする広範な領域について多くの研究を公けにされた。法学にとどまらず歴史学、宗教学に深い造詣を有する教授ならではの仕事であった。教授の研究業績はこのように広範囲にわたるが、それは個々の論点についても深い洞察を示すものであった。実証的研究と歴史的研究という方法論に裏打ちされたものであったが、敬虔な宗教者としての限りないヒュウマニズムも根底に脈打っていた。

教授は評議員、法学部長事務代行等の要職を歴任され、九州大学の管理運営に重要な役割を果たされた。学会においても日本刑法学会理事、同九州部会長として斯界の発展に多大の寄与をされた。国際交流ことに東独との学術・文化交流面で果たされた役割も大きいものがある。地域弁護士会の健全な育成にも尽力された。

今後の一層の活躍を期待されたところ、悪性の病に冒され、平成元年四月二五日に帰らぬ人となられた。享年五九歳であった。我々の胸中筆舌に尽くせぬものがあるが、今は本学部への多大の貢献に深く感謝しつつ、教授の御冥福を祈るばかりである。

横山晃一郎教授著作目録

著　書（編著を含む）

刑事補償（総合判例研究叢書（13））	一九六一年	有斐閣
刑事訴訟法の解釈	一九六五年	中央経済社
産業災害の法律（沢登佳人との共著）	一九六五年	同文館
寺社をめぐる刑事判例（上）（仲地哲哉との共編）	一九六五年	愛知学院大学宗教法制研究所
寺社をめぐる刑事判例（中）	一九六六年	同右
寺社をめぐる刑事判例（下）	一九七〇年	同右
教憲教規・神道編（上）（善家幸敏らとの共編）	一九七〇年	愛知学院大学宗教法制研究所
教憲教規・神道編（下）	一九七一年	同右
教憲教規・キリスト編（上）	一九七二年	同右
教憲教規・キリスト編（下）	一九七二年	同右
天皇制と宗教（下）（若原茂との共編著）	一九七二年	愛知学院大学宗教法制研究所
宗制・宗憲、改訂増補（1）（善家幸敏らとの共編）	一九七三年	愛知学院大学宗教法制研究所
天皇制と宗教（上）	一九七四年	愛知学院大学宗教法制研究所
憲法と刑事訴訟法の交錯	一九七七年	成文堂
ブーフホルツ他「社会主義刑事学」（共訳）	一九七七年	成文堂

刑事訴訟法（有斐閣新書、共著）	一九七八年	有斐閣
現代刑事訴訟法入門（編著）	一九八三年	法律文化社
講義刑事訴訟法（能勢弘之、大野平吉との共編著）	一九八四年	青林書院新社
誤判の構造 ――日本型刑事裁判の光と影――	一九八五年	日本評論社
たった一人のために ――ある昭和戦中派法学徒の戦後史	一九九〇年	成文堂

論　稿（発表年代順　著書再収録分は除く）

象徴ということ	一九五二年	名古屋大学法学部自治会論集「城跡に」第三号
東ドイツ刑法学界の現況	一九五四年	法政論集七号
アメリカにおける自白の任意性調査のための証人尋問の一例	一九五六年	判例タイムズ五八号
東ドイツにおける刑法典編纂の一動向	一九五六年	法政論集一〇号
東ドイツの検察官制度について	一九五七年	愛知学院大学論叢五巻
犯罪と階級闘争 ――東ドイツの論争――	一九五七年	法学セミナー二一号
ソビエト刑法の歴史をめぐる最近の論争について	一九五八年	愛知学院大学法学研究創刊号
東ドイツにおける刑事司法の発展	一九五九年	季刊法律学第二七号「社会主義国家の刑法」有斐閣
東ドイツの刑法補充法とその背景	一九五九年	法政論集一二号
ふたたび東ドイツの刑法補充法について	一九六〇年	法政論集一五号

昭和二五年政令第三二五号違反被告事件につき平和条約発効により免訴の言渡があった場合に刑事補償の請求ができるか	一九六〇年	愛知学院大学法学研究三巻一号
誤想防衛	一九六二年	綜合法学四七号
社会主義的弁護士制度への展開——東ドイツの場合——	一九六三年	法律時報三五巻二号
教唆の方法	一九六四年	「刑法判例百選」
捜査段階における参考人の隠匿と証憑湮滅罪の成否	一九六四年	「刑法判例百選」
東ドイツ司法制度の歴史と概観	一九六五年	福島正夫編「社会主義国家の裁判制度」東大出版会
東ドイツの紛争処理委員会——東ドイツ犯罪・刑罰理論の変遷と関連して——	一九六五年	同右
チェコスロバキアの区域人民裁判所	一九六五年	同右
起訴状一本主義(2)	一九六五年	「刑事訴訟法判例百選」
共犯者の自白	一九六五年	同右
既判力の範囲	一九六五年	同右
差戻判決の拘束力	一九六五年	同右
証拠開示	一九六五年	「刑事訴訟法基本問題四六講」一粒社
東ドイツと死刑	一九六五年	社会改良三五・三六号
東ドイツの紛争処理委員会	一九六五年	比較法二六号

Sozialistische Rechtsforschung in Japan——ihre Geschichte und Gegenwart——(Wissenschaftliche Zeitschrift der F.Schiller Univertät Jena, Jahrgang 15. 1966. Heft 3.)		一九六六年
全面改正の可否 ——［特集］刑法の改正をめぐって——	法律時報	三八巻七号
東ドイツにおける過失犯論の展開	日沖憲郎博士還暦祝賀「過失犯」（一）	有斐閣
日本における社会主義法研究の歴史と現状	法律時報	三八巻一二号
横領か背任か	「刑法の判例」	
刑事手続における当事者主義思想の展開	法律時報	三九巻一一号
罪刑法定主義の段階論的考察	比較法研究	二九号
社会変革と捜査の構造 ——過渡期の東ドイツを素材として——	愛知学院法学研究	一〇巻二号
勾留請求却下後の被疑者の身柄の拘束はいつまで許されるか	判例時報	五一〇号
勾留請求から勾留状の執行開始までの被疑者の身柄拘束とその日数の本刑算入の可否	判例時報	五二五号
航空機事故における管制官の注意義務	「交通事故判例百選」	
罪刑法定主義概念の再構成	佐伯千仞博士還暦祝賀「犯罪と刑罰」（上）	有斐閣
書評・中山研一「因果関係」	法律時報	三〇巻二号
東ドイツの捜査手続	刑法雑誌	一五巻三・四号
当事者主義と職権主義	法学セミナー	一四五号

一九六六年	
一九六六年	
一九六六年	
一九六六年	
一九六七年	
一九六七年	
一九六七年	
一九六七年	
一九六八年	
一九六八年	
一九六八年	
一九六八年	
一九六八年	

いわゆる国学院大学映研フイルム差押事件について	一九六九年	判例時報五五一号
公訴権の濫用	一九六九年	「法律学の基礎知識」有斐閣
公訴時効	一九六九年	同右
訴因と公訴事実	一九六九年	同右
訴因変更の要否（一）（二）	一九六九年	同右
訴因変更命令	一九六九年	同右
一事不再理の範囲	一九六九年	同右
一事不再理の効力と二重の危険	一九六九年	同右
証拠開示問題に関する二つの最高裁決定	一九六九年	判例タイムズ二三八号
訴訟指揮権に基づく証拠開示命令	一九六九年	判例タイムズ二三八号
証憑湮滅罪	一九六九年	「刑法基本問題六〇講」一粒社
尊属殺と平等 ――尊属傷害致死事件	一九六九年	長谷川正安編「憲法判例ハンドブック」日本評論社
性別による差別 ――尼崎売春取締条例事件	一九六九年	同右
共犯者の自白 ――練馬事件	一九六九年	同右
東ドイツと罪刑法定主義 ―戦後ドイツにおける罪刑法定主義論争―	一九六九年	法律時報四一巻七号
東独刑法改正について ――ナチ戦犯処罰論争をめぐって	一九六九年	法律時報四一巻七号
明治刑事法関係年表（一）――一八六七年～一八八九年	一九六九年	愛知学院大学法学研究一三巻一号

連続犯と公訴事実の同一性　一九六九年　「ドイツ判例百選」

書評・青木英五郎「自白過程の研究」　一九七〇年　法律時報四二巻六号

他人のために作成された調書　一九七〇年　「証拠法大系Ⅲ」日本評論社

賭博及ヒ富籤ニ関スル罪　一九七〇年　基本法コンメンタール「刑法」日本評論社

Die Kriminalität im Nachkriegsjapan——unter besonderer Berücksichtigung der Verkehrsdelikte　一九七一年　愛知学院大学法学研究一五巻一号

書評・岡部泰昌「検察官の客観義務」　一九七一年　法律時報四三巻四号

翻訳・E. Buchholz 他「社会主義刑事学」（一）　一九七一年　愛知学院大学法学研究一五巻二号

ホーリネス事件　一九七二年　「宗教判例百選」

普選の実施と諸宗教師の政治結社への加入を禁じた治安警察法五条の当否　一九七二年　同右

証憑湮滅罪　一九七二年　「刑法演習問題五五講」一粒社

イギリス刑法と罪刑法定主義——イギリス型近代刑法成立の論理——　一九七三年　山中康雄教授還暦記念「近代法と現代法」法律文化社

押収・捜索　一九七三年　「現代法学辞典」（一）日本評論社

検証　一九七三年　「現代法学辞典」（一）日本評論社
勾留　一九七三年　「現代法学辞典」（二）日本評論社
召喚・勾引　一九七三年　「現代法学辞典」（三）日本評論社
捜査　一九七三年　同右
逮捕　一九七三年　同右
横領か背任か　一九七三年　「刑法の判例」第二版
刑事訴訟法第三四一条～第三五〇条　一九七三年　基本法コンメンタール「刑事訴訟法」日本評論社
別件逮捕　一九七三年　「昭和四七年度重要判例解説」
予断排除　一九七三年　セミナー法学全集Ⅲ「刑事訴訟法」日本評論社
（刑事訴訟法二五年の軌跡と展望）［研究会］接見交通、公訴権の濫用、証拠開示、証拠排除　一九七四年　ジュリスト五五一号
刑事補償　一九七四年　「憲法判例百選」第三版
刑事法の解釈　一九七四年　法律時報四六巻一号
刑法改正手続の「適正」化を　一九七四年　法律時報四六巻六号

座談会・刑事訴訟における理論と政策（田宮裕・松尾浩也・鈴木茂嗣・横山晃一郎）	一九七四年	法学教室六号
書評・吉川経夫＝小田中聰樹「治安と人権」	一九七四年	法学セミナー二二八号
改正刑法草案の逐条的検討・「第二編第九章騒動の罪」	一九七五年	法律時報臨時増刊号「改正刑法草案の総合的検討」
航空機操縦士の注意義務	一九七五年	「交通事故判例百選」第二版
書評・桜木澄和「初期市民刑法における自由と人権の諸規定——一九七一年のフランス刑法典の構造と論理」	一九七五年	法律時報四七巻一一号
捜査の構造	一九七五年	高田卓爾・小野慶二編「刑事訴訟法の基礎」青林書院新社
告訴・告発	一九七五年	同右
裁判の確定・確定力	一九七五年	同右
判決の無効	一九七五年	同右
東ドイツの刑事裁判	一九七五年	法政研究四一巻四号
不利益変更の禁止	一九七五年	「公判法大系Ⅳ」日本評論社
付審判事件の審理方式	一九七五年	「昭和四九年度重要判例解説」
観念的競合・牽連犯	一九七六年	「判例コンメンタール刑法Ⅰ」三省堂
証書偽造罪、公文書偽造罪、虚偽公文書作成罪、	一九七六年	「判例コンメンタール刑法Ⅱ」

公正証書原本等不実記載罪、虚偽公文書行使罪　三省堂　一九七六年
刑事訴訟法第三三八条、第三三九条、第三四〇条、第三四一条、第三四二条、第三四三条、第三四四条、第三四五条、第三四六条、第三四七条、第三四八条、第三四九条、第三四九条の二、第三五〇条　「判例コンメンタール刑事訴訟法Ⅱ」　三省堂
ソビエト型検察官と大陸型検察官　——比較法学会シンポジウム「検察官」覚え書——　法政研究四三巻二号　一九七六年
天皇制と不敬罪　——序説　法律時報四八巻四号　一九七六年
刑事法解釈論批判　——罪刑法定主義と刑法の解釈——　「マルクス主義法学講座」七巻　一九七七年
レーニン・なぐれ、だが死なない程度に　「マルクス主義法学講座」八巻　一九七七年
ヨアヒム・レンネベルク教授を悼む　法律時報四九巻九号　一九七七年
刑法解釈学についての覚書　——法解釈論争と刑法学——　法政論集七〇号　一九七七年
千葉大チフス菌事件控訴審判決を読んで　ジュリスト六四三号　一九七七年
捜査の基本構造　松尾浩也・鈴木茂嗣編「刑事訴訟法を学ぶ」　有斐閣　一九七七年
東ドイツの検察官　比較法研究三八号　一九七七年
書評・中山研一「ポーランドの法と社会　——東ヨーロッパ法の実態研究——」　アジア経済一九巻一二号　一九七八年
書評・土本武司「犯罪捜査」　法学セミナー二八三号　一九七八年
書評・中武靖夫／高橋太郎編「捜査法入門」　同右　一九七八年

超法規的違法阻却事由・可罰的違法性——全農林事件	一九七八年	「刑法判例百選Ⅰ総論」
世界の未決拘禁法・ソビエト（佐藤雅美と共同執筆）	一九七八年	法律時報五〇巻二号
世界の未決拘禁法・チェコスロバキア（鯰越溢弘と共同執筆）	一九七八年	法律時報五〇巻二号
世界の未決拘禁法・ユーゴー（宗岡嗣郎と共同執筆）	一九七八年	法律時報五〇巻三号
世界の未決拘禁法・ハンガリー（土井政和と共同執筆）	一九七八年	法律時報五〇巻三号
必要的弁護事件と被告人の人権	一九七八年	法律時報五〇巻三号
世界の未決拘禁法・東ドイツ（植田博と共同執筆）	一九七八年	法律時報五〇巻五号
戦後改革と刑法改正	一九七八年	法律時報創刊五十周年記念
代用監獄のこと、など	一九七八年	「昭和の法と法学」
伝聞法則と直接主義	一九七八年	ジュリスト六七七号
伝聞の意義	一九七八年	光藤景皎・田宮裕編「ワークブック刑事訴訟法」有斐閣
検察官面前調書	一九七八年	同右
実況見分調書、検証調書、鑑定書	一九七八年	同右
刑事訴訟における理論と政策	一九七九年	「刑事訴訟法の争点」
偽装死亡による公訴棄却決定確定後の再訴	一九七九年	同右
世界の刑事再審法一〇・東ドイツ	一九七九年	判例タイムズ三七一号
世界の刑事再審法一一・ポーランド	一九七九年	判例タイムズ三七五号

世界の刑事再審法一三・ソビエト（平田元と共同執筆）　一九七九年　判例タイムズ三八四号

戦後の法律家――「新刑訴派」登場の周辺　一九七九年　ジュリスト七〇〇号

明治初年における検察制度の導入過程――比較法的視点から　一九七九年　鴨良弼先生古稀祝賀論集「刑事裁判の理論」日本評論社

Die Entwicklung der Strafgesetzgebung in Japan――Die Entwicklung des Japanischen Kapitalismus und das Strafrecht――　一九八〇年　法政研究四六巻二～四合併号

刑事訴訟法　一九八〇年　（一九八〇年学界回顧）法律時報五二巻一二号

刑事免責　一九八〇年　別冊判例タイムズ七号「刑事訴訟法の理論と実務」

再伝聞　一九八〇年　別冊法学セミナー四五号「司法試験シリーズ六・刑事訴訟法」

同意書面　一九八〇年　同右

被告人、弁護人不在下の検面調書の取調べ　一九八〇年　同右

書評・田宮裕「注釈刑事訴訟法」　一九八〇年　法学セミナー三一〇号

証拠開示　一九八〇年　佐伯千仭編「刑事訴訟法の考え方」有斐閣

刑事補償　一九八〇年　「憲法判例百選Ⅱ」

免田事件（鯰越溢弘と共同執筆）　一九八〇年　鴨良弼編「刑事再審の研究」成文堂

比較再審法・社会主義国――東ドイツ・ソビエトを中心に――　一九八〇年　同右

刑罰・治安機構の整備　一九八一年　福島正夫編「日本近代法体制の形成」（上）日本評論社

司法と検察　一九八一年　法学セミナー増刊「現代の検察」

公訴棄却決定に対する上訴――水本事件　一九八一年　「刑事訴訟法判例百選」第四版

書評・野村二郎「続・日本の検察」　一九八一年　法学セミナー三一七号

書評・野村二郎「東欧の罪と罰」　一九八一年　法律時報五三巻一二号

立法関係者の昭和刑訴観――立法理由確定の試みとして　一九八一年　法政研究四七巻二～四合併号

現代社会と刑法――いま全面改正の必要があるのか――　一九八二年　法と政策七月号

判例批評・再審開始確定と原確定判決の効力及び死刑確定者の身柄（免田事件）～最一小決昭五五・四・二八（大久保哲と共同執筆）　一九八二年　法学セミナー三二四号

「当世敬称」考　一九八三年　判例タイムズ五〇三号

一事不再理の原則　一九八三年　国民法律百科大辞典一、三巻

糺問主義　一九八三年　国民法律百科大辞典二、四巻

刑事補償　一九八三年　国民法律百科大辞典二巻

検察官　一九八三年　国民法律百科大辞典二、五巻

公訴事実の同一性	国民法律百科大辞典三巻	一九八三年
再審	国民法律百科大辞典三、四巻	一九八三年
職権主義	国民法律百科大辞典四、六巻	一九八三年
訴訟条件	国民法律百科大辞典五巻	一九八三年
デュー・プロセス	国民法律百科大辞典四、六巻	一九八三年
統一公判	国民法律百科大辞典六巻	一九八三年
附帯私訴	国民法律百科大辞典二、六巻	一九八三年
免訴	国民法律百科大辞典七巻	一九八三年
予審	国民法律百科大辞典七巻	一九八三年
昭和刑訴の現実化	井上正治博士還暦祝賀「刑事法の諸相」(下) 有斐閣	一九八三年
被疑者の取調 ——接見交通と関連させながら	法政研究四九巻四号	一九八三年
免田再審無罪判決	毎日新聞七月一五日夕刊	一九八四年
ロッキード裁判の問題点 ——「手続き」の重み忘れるな	読売新聞一一月一三日朝刊	一九八四年
可罰的違法性 ——全農林事件——	「刑法判例百選I総論」第二版	一九八四年
松山事件無罪判決をきいて	法律時報五六巻一〇号	一九八四年
未決勾留日数の本刑算入過小と刑事訴訟法四一一条二号	判例評論三〇七号	一九八四年
無罪判決の理由	法学セミナー三五三号	一九八四年
書評・増渕利行「ドキュメント東京拘置所」	法学セミナー三六〇号	一九八四年

アォフ・ヴィーダーゼーエン	一九八五年	「追想の阿部義任」成文堂
シンポジウム・報道と人権（横山ほか）	一九八五年	法学セミナー三七〇号、三七一号
維新における刑事司法の近代化とロシア・序説	一九八五年	「団藤重光博士古稀祝賀記念論文集第四巻」有斐閣
医療紛争処理の現況と未来	一九八五年	福岡県医報一一〇六号、及び東京都医師会雑誌三八巻三号
刑事弁護充実のための施策を	一九八五年	法と民主主義二〇〇号
欠席裁判	一九八五年	「司法試験シリーズ六・刑事訴訟法」新版
日本列島異常なし	一九八五年	判例タイムズ五五二号
明治五年後の刑事手続改革と治罪法	一九八五年	法政研究五一巻三～四合併号
ＶＩＰ特別警備	一九八六年	（特集・ドキュメント憲法問題入門一一）法学セミナー三七七号
賭博及ヒ富籤ニ関スル罪	一九八六年	基本法コンメンタール「刑法（第三版）」日本評論社
読書随想「戦後を疑う」（清水幾太郎）	一九八六年	月刊法学教室増刊「新法学案内'86」

犯罪報道、人権、そして「知る権利」	一九八六年	法政論集一〇九号及び法学セミナー増刊「人権と犯罪報道」再録
木のように	一九八六年	「自然と健康」二月号
読者から編者への手紙	一九八七年	図書新聞八月一五日号
博多駅事件	一九八八年	「法律事件百選」
「乞食王子」と裁判官	一九八八年	ジュリスト九一三号
リモコン片手に	一九八八年	中国税理士協同組合ニュース八三号
闇の声	一九八八年	不動産法律セミナー六月一五日号
刑事訴訟法講義の方法と課題（一）	一九八八年	法学セミナー四〇二号
刑事訴訟法講義の方法と課題（二）	一九八八年	法学セミナー四〇三号
刑事訴訟法講義の方法と課題（三）	一九八八年	法学セミナト四〇四号
再審の現実と構造（一）	一九八八年	法学セミナー四〇五号
再審の現実と構造（二）	一九八八年	法学セミナー四〇六号
再審の現実と構造（三）	一九八八年	法学セミナー四一八号
再審の現実と構造（四）	一九八八年	法学セミナー四一九号
刑事補償	一九八八年	「憲法判例百選Ⅱ」第二版

刑事補償法案改正意見　一九八八年　衆議院法務委員会
誤判構造と法曹一元　一九八八年　自由と正義三九巻二号
戦後刑事訴訟法学の潮流　一九八九年　法学教室一〇〇号
ウイ・シャル・オーバーカム　一九八九年　ジュリスト九三〇号
接見妨害上田国賠訴訟勝訴の意義　一九八九年　井上祐司先生退官記念論集「現代における刑事法学の課題」櫂歌書房